遺跡紹介　2026.06.20

史跡 賞田廃寺跡

辛川 あかり

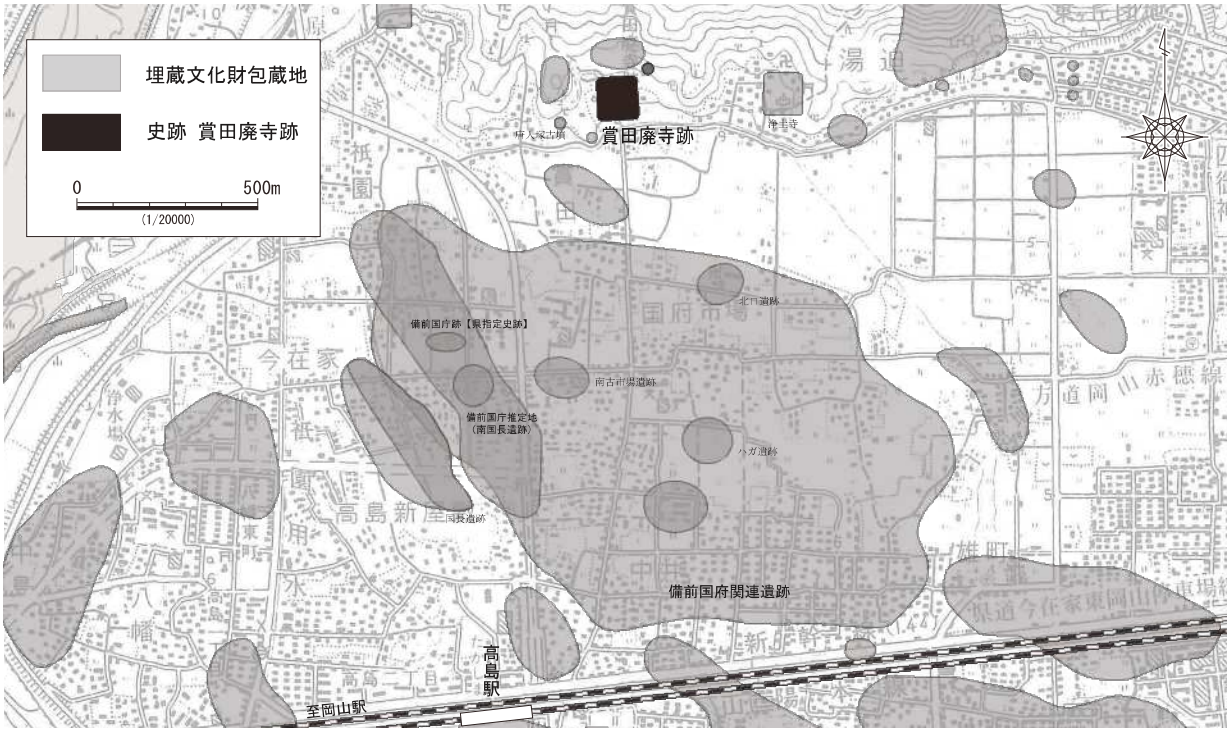

図１：賞田配置と周辺遺跡（S ＝ 1/20000）

【遺跡の概要】

史跡賞田廃寺跡は、中区賞田龍ノ口山塊の南裾部に建てられた岡山県内最古の古代寺院の一つである。古くから飛鳥時代後半や奈良時代の瓦が出土する古代寺院跡として広く知られており、昭和 45(1970) 年の発掘調査を経て昭和 47(1972) 年に国史跡に指定された。その後も平成 13(2001) 年～平成 16(2004)、平成 18(2006) 年に発掘調査が行われ、現在は遺跡公園として整備されている。

調査の結果、金堂・東塔・西塔・塀跡などの一部が確認された。出土遺物は瓦、土師器、須恵器、金属製品がある。出土した瓦は軒丸瓦・軒平瓦の文様の特徴から、飛鳥期［７C 中頃］、白鳳期［７C 後半］、天平期［８C 中～後半］、鎌倉時代［9 ～ 12C］、室町時代［14C］に分けることができる。賞田廃寺は、小さな建物として飛鳥期に創建され、白鳳期に金堂が、天平期に東西の塔が造営されたと考えられる。伽藍配置としては、金堂と東塔が接近した変則的な双塔式伽藍が想定される。東西両塔の基壇に採用された壇上積基壇は、畿内の有力寺院や都城で用いられるような格式高いもので、当時の立派な姿が想像できる。

発掘調査において金堂の周囲から出土した多数の瓦は、ほとんどが白鳳期の瓦であり、金堂は白鳳期に建立され、修理を受けながらも室町時代に火災で焼失するまで古来の姿をとどめていたと考えられる。

瓦のなかには幡多廃寺や古都（居都）廃寺、平城宮と同一文様の軒丸瓦や軒平瓦がある。これらの瓦は、賞田廃寺の造営に関わった瓦工人が幡多廃寺や居都廃寺、国衙の造営にも関わっていたことを示し、古代における瓦工人の行動範囲や、寺院間の関係性を探る手がかりとなる貴重な資料である。

【文献】　岡山市教育委員会 1971『賞田廃寺』
扇崎由・高橋伸二 2005『史跡賞田廃寺－史跡環境整備事業に伴う発掘調査報告－』岡山市教育委員会
草原孝典 2022「軒瓦からみた古代寺院と国府、国分寺の関係－備前国上道郡をケーススタディとして－」『岡山市埋蔵文化財センター研究　紀要』第 14 号，岡山市教育委員会

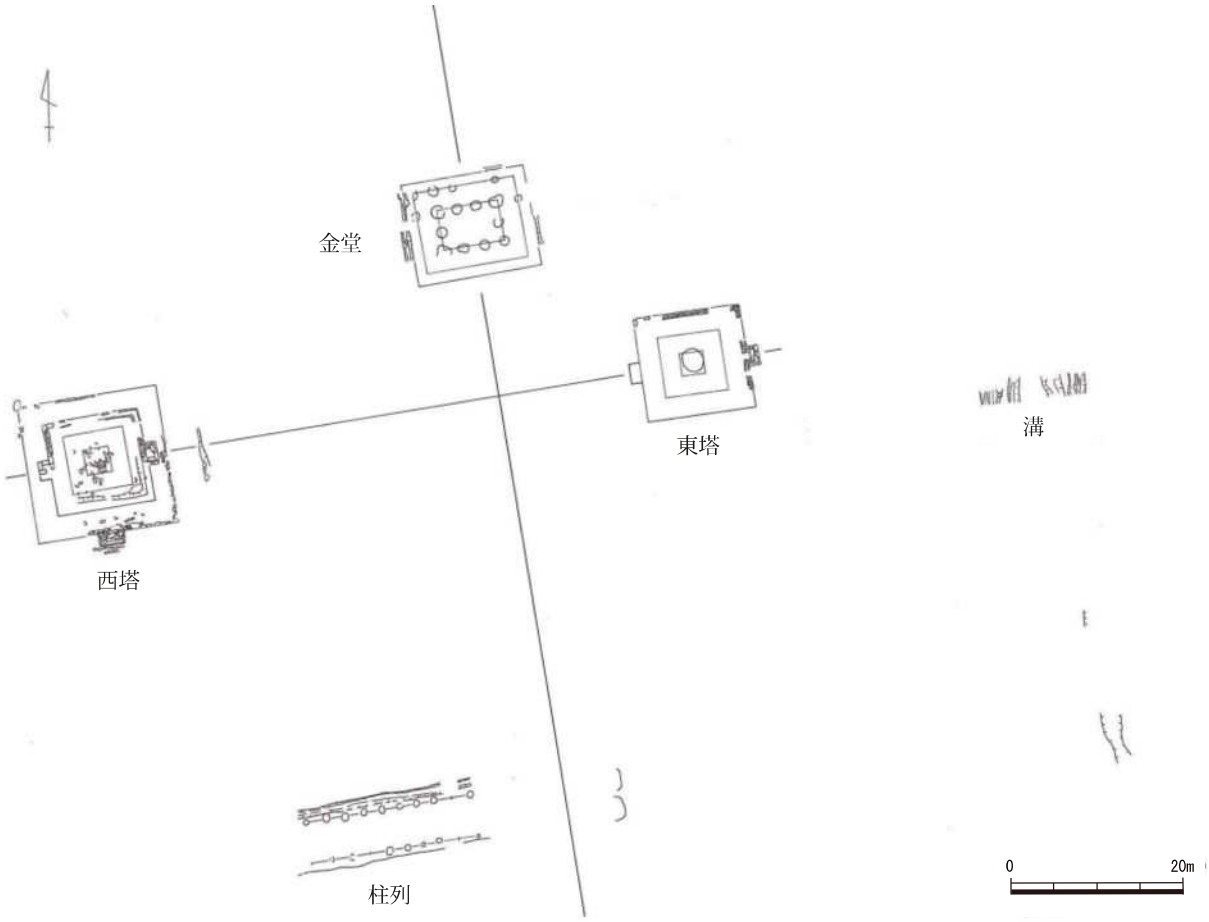

図２　賞田廃寺伽藍配置図

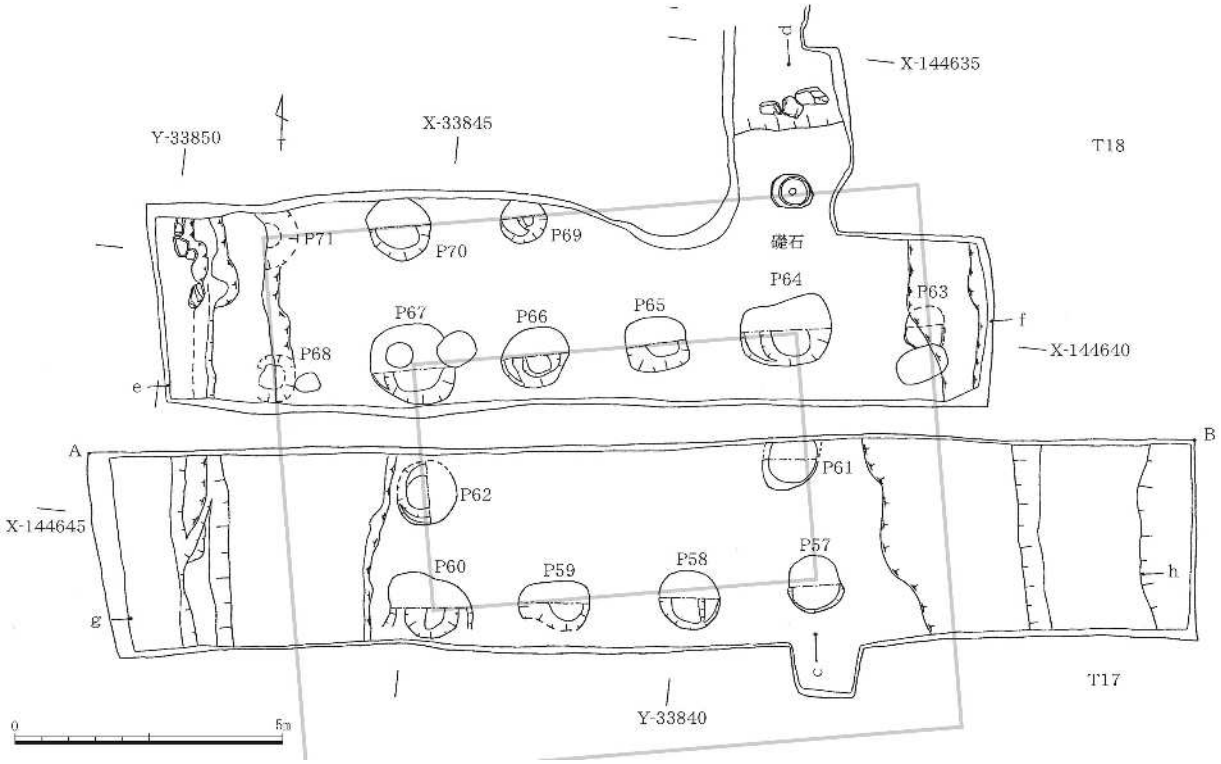

図３　金堂跡